

## 安藤陽先生のご退職にあたって

経済学部長 薄井和夫

安藤先生に対して、ご定年による送別の辞を書くことになろうとは、想像もしていなかった。じつは、安藤先生と私とは、ともに1982年4月に埼玉大学に赴任した同期である。それ以来ずっと埼玉大学経済学部で一緒に活動してきた。安藤先生のご退職が早いのは、たまたま私よりも若干年が上だったというだけにすぎない。赴任当日、学部長室で初めてお会いした時の安藤先生の穏やかな笑顔を、今でも昨日のこつのように思い出す。その笑顔は、ご退職の今にいたるまで変わることはなかった。先生は、常に、温和で思いやりのある態度で学生にも同僚にも職員にも接せられ、教授会や委員会などで幾度も経験した難しい局面でも声を荒げることがなかった。この1月に行なわれた先生の最終講義に私も参加させていただいたが、300人近い学生を前に行なわれた誠実さあふれる講義に接し、32年の長きにわたりこのような姿勢を貫いてこられた安藤先生に痛切な惜別の情を抱いたのは、ひとり私だけではなかったと思う。

安藤先生は、経済学部では「企業論」「公企業論」の講義を主に担当され、学部・大学院において多くの学生を育てただけでなく、1999～2000年、2012～2013年の2度にわたり、経営学科長を務められた。また、埼玉大学全体の国際交流事業に深くコミットされ、2000～2003年に埼玉大学留学生センター長、2008～2010年に埼玉大学国際交流センター副センター長、2010～2012年に同センター長の要職に就かれた。タイ王国チュラーロンコーン大学との交流の深化をはじめ、安藤先生が手がけられた国際交流の案件は多く、留学生に対しても、常に、親身になって接してこられた。埼玉大学の印象を安藤先生のお姿とだぶらせて思い起こす留学生は少なくない。

定年制度というのは、ある意味では残酷なもので、いくら名残惜しいと周りが思っているとしても、来年度からは安藤先生のお姿を埼玉大学でいつも拝見するというわけにはいなくなる。もちろん、来年度1年間は非常勤として演習などを担当され、また、研究などでお目にかかる機会も少なからずあるはずであるが、やはり、ほぼ毎日接していたこれまでとは比べものにはならない。

安藤先生には、この32年間の埼玉大学へのご貢献に対して、厚く御礼を申し上げると同時に、今後とも変わることなく、お元気で、誠実な研究活動に携われることを祈念してやまない。

(2013年3月2日)